

風を起こす <第12回>

「一番になるといふのは、才能じゃなく努力です」

岩手県藤沢町自治振興課地域振興係長

畠山 浩さん

「人生で一番もったいないことは、自分の才能を生かさないこと」と言ったのは誰だったろうか――。

岩手県藤沢町。人口一万人にも満たないこの町は、全国広報コンクールで内閣総理大臣賞二回を含む入選一九回を果たしている。現在の立役者が、たった一人で広報誌制作を担う畠山浩さん。バリバリの体育会系出身でありながら、文化系においても圧倒的な能力を開花させている。

一人六役をこなして高品質

企画から取材、写真撮影、原稿執筆、デザイン、組版まですべてを一人でこなすなど、にわかには信じがたかった。「[i>sawawa]」は広報誌とはいってもカラ―を含む三二ページの月刊で、写真もデザインも文章も、書店に並ぶ雑誌に

一歩も引けを取らないクオリティの高さなのである。

例えば二〇一〇年五月号。地元少年野球チームのピッチャーが表紙を飾る。球を投げる瞬間が切り取られた写真。緊迫した試合だったのだろう――少年の真剣な表情が見る者の想像をかきたてる。その様子は「ヒートアップする藤沢の野球」として特集記事が組まれた。

[はたけやま こう]

1965年、岩手県藤沢町生まれ。日本体育大学体育学部卒業。都内にある不動産会社を経て、'91年藤沢町入庁。スポーツ振興課、海洋センター、農林課、企画室を経て、'99年より広報担当。家族は妻、長女、長男の4人。特技は野球。





「Fujisawa」2010年5月号。
特集の一つが「上質への流儀」



もう一つの特集記事は「上質への流儀」。広報誌らしからぬ凝ったコピーには、広報担当である畠山浩さんの思いが込められていた。

「はじめは単なる作品展の紹介記事を考えていました。ところが、取材してみるとすごく感動したんですね。なぜ



感動したんだろうと突き詰めた結果人間の生き方にまで触れた七ページの特集記事に発展したのです」

地元書道家が始めた米の無農薬栽培。そこに参加した他県在住者を含む五人全員が偶然にも陶器、木工品、写真のアーティストだった。付き合いが積み重ねる中で作品展を開催する運びになったという話だが、畠山さんはインタビューをする中で、彼らの中に、ある共通項を見出した。

「現代は競争社会です。常に自分以外の誰かと競っています。ところが、この五人にとって競争相手はあくまでも自分。昨日の自分と今日の自分で競っているんですよ」

個を失って皆が同質化している時代を憂い、自分というものをしっかりと持つことの大切さを思い出してほしいとの思いを、ページ全体で表現した。一点一点丁寧に撮られた物撮り写真、心の内側まで写し出すような人物写真、研ぎ澄まされた文章。一切の妥協はせず、すべてに全力がそそがれている。毎号すべてのページにこの姿勢を貫く。「だから、校了後はマラソンしてゴールに倒れこむのと同じ状態です」

自りを奮い立たせた二つの転機

畠山さんが東京でのサラリーマン生

活を経て、故郷に戻ったのは二六歳の時だった。日本体育大学で学んだ経験を生かし、配属先のスポーツ振興課ではスポーツインストラクターを務めた。企画室に異動すると、町全体の調整や企画立案に携わった。広報担当になったのは入庁八年目、結婚して二人の子どもも可愛いさかりだった。

「当初はA4版一六ページの二色刷りで、記事も各部署から集めていたので楽勝でした」

前例どおりのありふれた広報誌。脱却のきっかけは同級生の取材拒否だった。町の子どもを紹介するコーナーに出てほしいと頼んだところ「広報誌はつまらないし、写真もヘタクソだから嫌だ」と断られたのだ。頭から冷水をあびせられたような気持ちだった。広報担当になって三カ月、自分ではカメラを構える姿が板についてきたと感じただけに、悔しさもひとしおだった。

そこから、畠山さんの挑戦が始まった。我が子をモデルに、ひたすらシャッターを切る日々。子どもたちが嫌がるようになる、一回一〇円のモデル料を払って被写体を確保した。絞り、シャッタースピード、露出。どうすればきれいに撮れるのか、六つ切りサイズで現像した紙焼き写真は千枚以上に及んだ。



広報担当になった当初発行していた「広報ふじさわ」。
どこにでもある普通の広報誌だ



文章力は日常生活の中で鍛えた。信号待ちで目にした看板、缶コーヒートのパッケージ、飲食店のチラシ。常にアンテナを張り、引つ掛かるものがある。なぜその言葉が自分の心をとらえたのか原因を探るのだ。

「テレビニュースも、俺の場合は見るんじゃなく、聞くんです」

寝ても覚めても表現力を磨く訓練が続いていたある日、さらなる飛躍のチャンスが訪れた。地元中学校の女子ソフトボールが全国大会で優勝し、その記念の特集記事を書いたところ大反響を呼び、増刷がかかったのだ。

「ゾクゾクしましたね。読まれる、必要とされるのはこんなに素晴らしいんだというのを体感して、それまでは滅多に載せなかった特集を、毎号欠かさず載せるようになりました」

広報誌に秘められた可能性

現在では月二本の特集だけでなく、年数回は二〇ページを超える大型特集を組む。〇二年九月号では障害のある双子の姉妹に九カ月間密着し、バリアフリーやノーマライゼーションについて考えた。〇四年二月号では「大規模災害と危機管理」をテーマに二年半かけて取材・編集し、四三ページの超大型特集記事となった。

過疎化や高齢化が進む中、山積する課題を解決していくには住民の理解、住民の参加が欠かせない。

「だからといって、広報誌が制度や事業をインフォメーションするだけの媒体であってはいけないですよ。

むしろ、広報誌には役所と住民の距離感を縮めることが求められるのです」

ソフトボールで渾身の力を込めバットを振る女の子も、満面の笑みを浮かべたおばあちゃんも、畠山さんの手にかかれば立派なカバールになる。中を開けば、新聞よりも詳しく掘り下げられた町のニュースが載っている。藤沢町の住民にとって、広報誌こそ最大の情報源であり、コミュニケーションツールであり、娯楽なのだ。

藤沢町の広報誌は全国広報コンクールで内閣総理大臣賞を二回受けている



どの写真をとっても町の人への愛情、やさしい眼差しが伝わってくる

が、畠山さんは賞レースに興味はない。「賞をもらっても、町は変わりませんから。ただ、良い広報誌を作っていると、人が変わり、町が変わります」

「最も気を遣う」という人物紹介の記事で、取材対象者の横顔や人生観にまで触れることによって、読者の奮起の糸口や生きるヒントにつながれば、こんな嬉しいことはない。前述した地元書道家も、米の無農薬栽培を始めたきっかけは広報誌にあった。広報誌とは、住民の人生も変えてしまうほどの可能性を秘めた媒体だったのか――。



2001年全国広報コンクール
で内閣総理大臣賞を受賞した
2000年12月号



予算がないのが武器？

これほどの存在感を持つ広報誌だから、当然、予算も充分あるのかと思いきや、額を聞いて驚いた。三五〇〇部、三六ページの月刊誌で年間二〇〇万円——って、つまり一号あたり約一七万円ってこと！ 競争入札で落札業者が半年間決まらなかったのもうなずける。

なぜ、そこまで低予算なのか？

実は、藤沢町は一関市との合併協議会が一度決裂している。その原因は財政難だった。町では八〇年代、農業を基幹産業にするしかない、莫大な投資をした。山を削って畑を造り、国営事業や県営事業の大型プロジェクトを投入して三つのダムを造った。だが、償還金に充てていた地方交付税の額が激減し、一気に財政難に陥った。

職員の賃金が毎年カットされ続けるような状況だから、広報誌だけ予算を増やすというわけにはいかない。普通なら、月刊誌を季刊誌にするとか、ページ数を減らすとか考えるところだろう。だが、畠山さんは印刷会社がやるべき作業も自らこなすことで経費節減を図った。DTPを使った組版技術を習得し、写真の画像処理もプロ顔負けの腕前を身につけた。

パソコンの画面上で線を引く際、多くの人はマウスを使うが、畠山さんはテンキーを使って数値入力する。

「『東京カレンダー』っていう雑誌が好きで、一度、真似して作ったことがありますよ。文字もデザインもすべて定規で測って模写したつもりなのに、同じものはできなかった。罫線の太さや文字間といった、一〇〇分の一ミリの違いが影響していたんですね」

一〇〇分の一ミリの世界を知ってか

あまりないことが最高の能力

「人がやらないようなところまでやった時に初めて、美しさが出るのです」

もはや職人の域に達した畠山さんには、他の自治体で広報誌を担当する弟子や孫弟子が一七名もいる。加えて、県内外のセミナーで講師を務める機会も多い。座右の銘は「知識より意識能力より努力」。自らの経験から生まれた言葉だ。

小学校から野球を始め、中学校ではピッチャーとして鳴らした。夢はプロ



バックナンバーと共に、数々のコンクールで頂いた表彰状や盾が並ぶ

畠山さんの作業場。
パソコンの壁紙を飾るのは愛息・壘くんの雄姿



野球選手。高校進学では野球の名門校から声がかかると信じていた。ところが、スカウトされたのは自分がバッテリーを組んでいたキャッチャーと、地区予選を争っていたライバル校のピッチャー。「シヨックでしたね。そうか、一流校でやるためにはこういうペアなのか、俺はそこに入れなかつたんだなって。もう、野球なんかやつてられるかって感じですよ」

大きな挫折感を味わった野球少年は、高校に入ると一人でできる陸上競技に転向。短距離と走り幅跳びでは、県大会で二位になるほど活躍した。だが、野球への未練は引きずつたままだった。

「野球にしても、陸上にしても、当時は一生懸命やっていたつもりだけど、全力を尽くしていたかという疑問。今

思えば昔は簡単にあきらめていたんだね。もう後悔はしたくないから、広報では完全燃焼できたんですよ。

よく、センスがあるとかないとか言うけれど、努力によって後天的なセンスをつかむことはできる。要は、眠っている潜在能力をいかに引き出すか。だから、一番になるというのは才能じゃなく努力です」

極めた人間だからこそ言える真理なのかもしれない。

大好きな町や人への恩返し

今年四月、藤沢町では再度、一関市との合併協議会が設立され、順調に協議が進められている。

広報誌では、改めて町を振り返るミニコーナーを設け、人物紹介のコーナーも増やされた。「合併までの期間、一人でも多くの町民を取り上げたい」からだ。

「俺、この町に惚れているんですよ。この町が好きなんです。だから、俺にとって広報誌は、町や人へのラブレターみたいなもんです」

キザなセリフだが、思いは本物だ。

畠山さんは小学校六年生の時、母を亡くした。役場で財政担当をしていた父は帰りが遅く、四つ上の姉も地元を離れていた。学校から帰っても一人。

暗い家の中で寂しさを救ってくれたのが、地域の温もりだった。

「ご飯食べていけとか、風呂入っていけとか、地域の人が我が子同然で育ててくれました。そのお陰で、つらい時期もぐれずに済んだ。本当によくしてくれた地域の人たちに、何か返さないといけないなど、ずっと思っていて。それも、広報誌にかける大きな原動力になっています」

情熱を注ぎ込んできた広報誌制作だが、新市になれば担当を外れる可能性は高い。「他の部署に異動しても、同じように仕事できますか？」の問い掛けに、畠山さんは「できます」ときっぱり。

「広報から離れたら、家庭では女房に尽くしますよ」

ケアマネジャーとして福祉に携わる妻も同じ町職員。仕事で忙しいのはお互いさまだ。だが、家事は一切、妻任せだった。妻が子育てや家庭のことで相談に乗ってほしくても、夫は仕事で家にいない。たまにキレられても当然だろう。

「内助の功があったからこそ、俺は広報に打ち込むことができたんです。今まで苦労かけた分、返さないと」

カメラのファインダー越しに、妻の笑顔が輝く日も近い。

(協会職員／篠田良子)